



Title	「話しことば」における「非情の受け身」の増加とその要因
Author(s)	西川, 真理子
Citation	大阪大学言語文化学. 1994, 3, p. 51-64
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78149
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「話しことば」における「非情の受け身」の増加とその要因*

西川真理子**

The purpose of this paper is twofold. Firstly, by comparing the data of the Edo-era Japanese and those of modern Japanese, I demonstrate that the use of “inanimate passive” has increased in frequency since the Meiji era, not only in written Japanese but also in spoken Japanese. In so doing, I discuss two semantic properties to be noted in connection with this increase: adversity and agency. That is, while inanimate passive in the Edo-era Japanese generally implies adversity as well as agency, it didn't imply either in modern Japanese. Secondly, I propose that this increase of inanimate passive is a consequence of two factors. One is that the intransitive active construction has been replaced by the corresponding transitive passive construction. The other is that with the increase of Sino-Japanese transitive verbs which lack the intransitive counterpart, their passive forms have been favored over the intransitive forms of the corresponding Japanese-origin verbs.

1 はじめに

「非情の受け身」というのは、主語が無生物である受け身のことである。「有情の受け身」こそ日本語本来の受け身であり、「非情の受け身」は日本語固有のものではない、という説が従来は強かった。しかし、宮地(1968)・三浦(1973)・原田(1974)・小杉(1979)・清水(1980)らによって、日本語にも古くから、「非情の受け身」が存在することが明らかにされた¹⁾。さらに、松村(1958)・土屋(1962)によって、明治時代以降の東京語の特色として「非情の受け身」の発達が挙げられ、清

*The Increase of “Inanimate Passive” in “Spoken Japanese” and Its Factors (Mariko NISHIKAWA)

** 言語文化研究科言語コミュニケーション論講座

¹ 遅くとも山田(1908)から非固有説が提出されているという。(金水 1991a)

水(1980)によって、明治時代以降の「非情の受け身」の急増が数量的に証明されるに到った²⁾。また、その増加の原因については、金水(1991a)においては近代的発想の誕生に求められている。

「書きことば」だけでなく「話しことば」においても「非情の受け身」が増えた、ということを数量的に示し、その増加の要因の一つを取り上げるのが本稿の主旨である。「書きことば」が人間にとって意識的なものであるのに対して、「話しことば」はより無意識的なものだといえよう。「非情の受け身」という言語表現が「話しことば」の中で無意識のうちに使われるほどに、日本語の中に浸透しつつあるということは、日本語にとって大きな変化だと考えられる。また、その原因を追及することは、「言語の変化」一般について考えていく上でも何か示唆を与えてくれるだろう。

2 「話しことば」における「非情の受け身」の増加

2.1 江戸時代と現代の「非情の受け身」の数量比較

まず、江戸時代と現代の「話しことば」における「非情の受け身」の使用数を比較することによって、「話しことば」における「非情の受け身」の増加を実証する。「話しことば」として用いる資料は、江戸時代については、当時の「話しことば」として一般的に認められている³⁾文学作品である『洒落本』・『滑稽本』・『人情本』の中の「話しことば」を使った。現代の方は、映画・ドラマのシナリオとテレビのインタビュー番組の『徹子の部屋』の中の「話しことば」を使った。使用された受け身表現総数に占める「非情の受け身」の数を比較すると表1のようになった⁴⁾。

この結果から、明治時代以降、「書きことば」だけでなく「話しことば」においても「非情の受け身」が増加したということがいえる。

²清水(1980)は、中古、中世、近世の古典作品と近代の文学作品において、受け身表現に非情の受け身の占める割合を比較し、中古、中世、近世を通してはたいして大きな変化がない(平均15%)のに対して、近代になると37%まで急増したことを明らかにしている。ただし、ここでは「書きことば」と「話しことば」は区別して取り上げられていない。

³松村(1957)・小松(1985)等。

⁴池上(1953)に基づいて「黄表紙」も「話しことば」の資料として認めるとすると、江戸時代の「非情の受け身」が受け身全体に占める割合は、1.5%(747語中11語)となる。

履」・2の「脇差」・3の「金」・4の「かね」・5の「路用」は、いずれも人間の所有物であり、背後に「被害」を受けた人間の存在が感じられるものである。これらの名詞句には助詞「は」が付いているが、主語(「ガ格」でマークされる)だとは言いきることはできず、目的語(「ヲ格」でマークされる)である可能性もある⁶⁾。この場合、これらの受け身には、動作・作用を受ける主体(人)が別に存在し、「持ち主(所有)の受け身⁷⁾」とよばれる受け身になり、「非情の受け身」ではなくなる。また、「被害」の意味を含んだ受け身だといえる。

(10) 武満さんの作品は、もうずいぶん外国で演奏されてるでしょ? 『徹』

上の例文10は、現代の「非情の受け身」の一例であるが、この場合は前出の例文1～5とは異なり、助詞の「は」を「を」に代えて読むことが不可能であり、「被害」の意味を含まないものだといえる。江戸時代には、人間の所有物が主語になっている「非情の受け身」が9例中6例(66.7%)であるのに対して、現代では、「非情の受け身」85例中9例(10.6%)と少ない⁸⁾。

また、受け身を、動作主につく助詞によって、形態面から「に受け身」と「によって受け身」に分け、「によって受け身」が「中立受け身」であるのに対して、

⁶⁾例文9においても、「もたれた」を述部にもってきた場合、「もたれた」対象である「金」は、「ガ格」でマークされている可能性と、「ヲ格」でマークされている可能性がある。

⁷⁾「持ち主の受け身」と言われるものについては、一般に「被害受け身」だとされているが、そのうち、目的語に分離不可能な身体部分がくる、いわゆる「部分の受け身」については、「中立受け身」だとみなす考え方が最近強いようである(森山(1988)・仁田(1992))。また、久野(1983)・黒田(1985)・柴谷(1991)によると、「部分受け身」に限らず「持ち主の受け身」の中には「中立受け身」に解釈されるものがあることが主張されている。

⁸⁾現代の「非情の受け身」のうちで、人間の所有物が主語になっているもの9例を以下に挙げておく。

(1) 着物は洋服に替えられましてね。 『徹』

(2) 他のもんは全部、あっちの子供さんに押さえられて、… 『恋』

(3) あの人のもんは、全部持っていかれまして、… 『恋』

(4) それだけの才能が、そのジョゼフィン・ペーカーのレコードで引き出された… 『徹』

(5) 向こう(妻)はこんなに肥ってて、アダ名が、ブクバンっていわれた… 『徹』

(6) (私は)爆風で鼓膜がやられて… 『徹』

(7) それ(小説)で死ぬ不安が救われるかと思ったら… 『徹』

(8) 父のイメージが傷つけられたんだな。 『ド』

(9) さっき本社から決定が送られてきまして、… 『渴』

現代の用例のうち、人間の所有物が「は」でマークされていて、「ヲ格」と解釈すれば、「持ち主の受け身」となって「非情の受け身」でなくなる可能性のあるものは、例文1、2、3の3例だけである。

「に受け身」は「被害性(受影性)」のある受け身だとする立場がある⁹⁾。

この分類にあてはめてみると、江戸時代の「非情の受け身」についてはすべてが「に受け身」だと考えられる。例えば、例文4の場合は、動作主が明白であるから明示されていないのだと考えられるが、文脈から明白な動作主「宿屋」を文中に明示しようとする、助詞「に」を伴った「宿屋に」という形で表わされると考えられるので、この場合は「に受け身」に分類される¹⁰⁾。それに対して、現代語の方は、「非情の受け身」85例中、「に受け身」は20例で、「によって受け身」が65例とはるかに多いという結果を得た。前出の例文10も「によって受け身」の例である¹¹⁾。

小杉(1979)は、「非情の受け身」でも、非情物の主語が擬人化されている場合や、人の身体の一部や、人の乗っている物や着ている衣装などである場合は、「なんらかの意味で、その表現の中に『人』が感取されるものであり、純粹の『非情の受け身』ではない」と述べているが、江戸時代の「非情の受け身」は、このようなタイプの「非情の受け身」がほとんどである¹²⁾のに対して、現代の「非情の受

⁹ 「に受け身」と「によって受け身」という形態的な特徴と意味的な特徴との関係について言及したものに、井上(1976)・黒田(1985)・益岡(1989)・金水(1991b)等がある。井上(1976)は、「に受け身」は「によって受け身」と異なり、主語が動作主の働きかけを感じるもの、あるいはその働きかけによる直接の影響を受けるものである場合だとしている。黒田(1985)では、「に受け身(二受身文)」と「によって受け身(ニヨッテ受身文)」との別が意味論上の区別に由来するとし、「に受け身」は「その主語の指す主体が要素文の表わす事態によって何らかの作用を受けるという意義を含む主語」としているが、ここで用いられている「作用性(affectivity)」という概念と「被害」という概念との意味的な関係については明らかにされていない。益岡(1989,1991)においては、「に受け身(与格受動文)」と「によって受け身(非与格受動文)」は、それぞれ、「昇格受動文」と「降格受動文」に対応するとし、「昇格受動文」のうちの「受影受動文」が「受影性」のある受け身、すなわち「被害受け身」だとしている。また、金水(1991b)は、「に受け身」を許容するものとして、「人格のある動作主を二格で表示した受身文は、1. 共感の対象として解釈可能な主語、または、2. 共感の対象である間接的な関与者を持たなければならない。動作主に人格がなければ、この限りではない。」という仮説を立てている。

¹⁰ ここで、「に受け身」か「によって受け身」であるかの判断は、現代語の感覚に基づくものであり、この判断に基づいて分類するのは危険だという指摘を金水敏氏より頂いた。

¹¹ この場合、動作主は「武満さん」だと考えられるが、動作主を明示しようとした場合、助詞「に」でマークすると、「に」でマークされた「武満さん」に動作主の解釈は不可能となり、「武満さん」に動作主の解釈をもたせるためには、助詞「によって」でマークしなければならない。

¹² 例文7,8は、小猫の名前を決めるのに、弱いものからより強いものへと名前を変えていく(虎→龍→雲→風→障子→ねずみ→猫)という文脈での発話であり、擬人法ともうけるとことができ、純粹な「非情の受け身」だとは言えない。また、益岡(1991)では、「非情の受け

け身」においては、「被害」の意味を全く含まない、純粋な「非情の受け身」の方がはるかに多いということが大きな特徴として挙げられる。

2.2.2 動作主について

江戸時代と現代の「非情の受け身」の比較においてみられるもう一つの特徴として、「動作主」が特定のものか、そうでないか、ということが挙げられる。

江戸時代の例文については、1を除くすべてが動作主が特定である場合である。これに対して、現代の方は、動作主が特定のものは85例中21例で、不特定のものの方が64例とはるかに多くなっている。

- (11) 妻はこんなに肥ってて、アダ名が、ブクパンっていわれた … 『徹』
- (12) 全然名前の知られてない絵描きさんの絵が … 『花』
- (13) 喜劇にもロッキード事件がとり上げられていましたし、… 『徹』
- (14) アメリカなんかでも、オープン・スクールなんていうのが考えられて、… 『徹』
- (15) これ(絵本)は世界各国で翻訳されて、… 『徹』
- (16) サンフランシスコ条約が調印されて、… 『徹』
- (17) 女の道は限られておるのであります。 『彼』
- (18) 男女雇用機会均等法が実行されている今の世の中に、… 『幸』
- (19) 敵の言葉も使えるというような意味が含まれているわけですね。 『徹』
- (20) テレビチューナーが内蔵されていますから、… 『バ』

身」の場合でも「受影受動文」に分類されるものがある、としている。ここで、「受影受動文」というのは、表現者が主体の側にたって主体が経験する事象を描くもので、中立的な立場ではない主観的な表現だとする。そして、受影受動文には、表面には現れないが、その受動文が叙述している事象から何らかの影響を受ける「潜在的受影者」が存在している、としている。この考えに基づくと、「非情の受け身」でも「潜在的受影者」の存在が感じられるものは「被害」の意味合いを含むことになる。

上の例文 11 ～ 20 は、現代の「非情の受け身」の例である。11,12 は、動作主が人一般である場合であり、13 ～ 16 は、特定の動作主が存在するが、それが誰か、ということが問題にされていない場合だといえる。さらに、17 ～ 20 のように、「によって」でさえ動作主を表わすことができないような、動作主の存在がほとんど感じられないものまである。

3 「非情の受け身」増加の要因

前章では、「話しことば」における「非情の受け身」の増加を、江戸時代後期と現代の言語データの数量比較によって示し、さらに、その特徴を比較した。本章では、本稿のもう一つのテーマである「非情の受け身」の増加の要因について考察する。

さて、非情物(無生物)を主語とする言語表現には、「自動詞能動表現」と「他動詞受け身表現」の2つの可能性がある。

- | | |
|---------------|--------------|
| a. 本が [ある]。 | ([無対自動詞]能動) |
| b. 本が [読ま]れる。 | ([無対他動詞]受け身) |
| c. 本が [破れる]。 | ([有対自動詞]能動) |
| d. 本が [破ら]れる。 | ([有対他動詞]受け身) |

ここで、「有対他動詞」とは、対応する自動詞のある他動詞のことである。例えば、上の例文では、対応する自動詞「破れる」をもつ他動詞「破る」がその例である。また、対応する自動詞を「有対自動詞」という(早津(1990))。上の例文「ある」・「読む」のように対になる動詞をもたない場合には、それぞれ、無対自動詞の場合には能動表現(例 a)、無対他動詞の場合には受け身表現(例 b)の一方の表現方法しかとれない。それに対して、上の例文の「破れる」・「破る」のように対になる動詞がある場合には、能動表現(例 c)と受け身表現(例 d)の2つの表現の可能性がある¹³⁾。

主語が非情物で、かつ、動詞が対のある動詞である文において、江戸時代には、

¹³ 両者に意味上の違いがあるのは当然であるが、そのことについては、ここでは触れない。

そのほとんどが、例文 c のような自動詞能動表現であったのに対して、現代では、例文 d のような他動詞受け身表現で表わされるようになってきた。このことに「非情の受け身」増加の要因を求める¹⁴⁾。そして、他動詞受け身表現の増加要因として、次の 2 つを挙げ、以下、それぞれについてみていくことにする。

他動詞受け身表現の増加要因：

- (1) 「有対他動詞受け身表現」の「有対自動詞能動表現」への侵食
- (2) 「無対他動詞」の「有対他動詞」への侵食¹⁵⁾

3.1 「有対他動詞受け身表現」の「有対自動詞能動表現」への侵食

非情物が主語の場合は、江戸時代には次のように「自動詞能動表現」で表わすことがほとんどであった。

- (21) よつほど手間がとれることがあつてもいいよふに… [とられる] 『春梅』
- (22) 大井川はとまりました。(注：「川止めになりました」の意) [とめられ] 『東海』

現代においては、上の例文 21,22 は、それぞれ、「手間がとられる」、「大井川がとめられる」というふうに、他動詞受け身表現で表わす方が自然だと思われる。このように、対応する自動詞をもつ有対他動詞の場合には、受け身表現を使わずに能動表現で表現できる場合が多い。今回の調査において、江戸時代の「非情の受け身」については、有対他動詞自体が一つもなかった。それに対して、現代の方は、有対自動詞能動表現で書き換え可能な有対他動詞受け身表現が 85 例中 15 例みられる。

¹⁴⁾ 金水(1991a)のいうように、近代的発想が生じた結果、「もの」を個体、あるいは総称的な種として、その履歴や属性を語る表現が生まれたと考えれば、非情物を主語とした文自体が増えたということもいう必要があるだろう。しかし、ここでは、非情物を主語とした文内部における変化に限って考察する。

¹⁵⁾ 漢語サ変動詞の増加に伴う「無対他動詞」の増加によって、和語の「有対他動詞」が侵食されたということをいうためには、数量的な証拠が必要である(ただし、実際には不可能であるが)。金水敏氏の助言に従って、「漢語サ変動詞の増加に伴って「無対他動詞」が増加した」というにとどまった方が正確であろう。

- (23) 父のイメージが傷つけられたんだな。 [傷つい] 「ド」
- (24) 進路もやはり、高等学校で決められるわけですね。 [決まる] 「徹」
- (25) 私の店が傷つこうが、つぶされようが、… [つぶれ] 「花」
- (26) 何もかも流されていってしまいそうで、… [流れ] 「彼」
- (27) オープンっていうのは、学校の壁が開かれてることですから。 [開い] 「徹」

上の例文 23～27 は有対自動詞([]内)をもつ有対他動詞の受け身の例である。現代の「非情の受け身」85 例のうちで、動作主の明示されているものは 1 例もなかった¹⁶⁾。動作主が明示されない場合として、2 つの場合が考えられる。動作主は特定だが明示する必要がない場合(例 23)と、動作主が不特定なため明示する必要がない場合(例 24～27)である¹⁷⁾。このような場合には、動作主の存在がほとんど問題にされておらず、有対自動詞能動表現での書き換えも可能だと考えられる¹⁸⁾。

¹⁶ 一般に、「非情の受け身」については、動作主が明示されない場合がほとんどである。動作主が明示される場合は、動作主が特定の場合だと考えられ、その場合には、非情物を主語とするよりは有情物を主語として表現するのが日本語においては自然だからであろう。また、あえて動作主を明示する場合は、「有情の受け身」が「に」という助詞を伴うのに対して、「によって」という助詞を伴って動作主を明示することになる。

¹⁷ 動作主が明示されない場合については、西川(1991)を参照されたい。

¹⁸ このことは、有対他動詞能動表現のすべてにおいていえるわけではない。

- (1) その海軍さんに陸軍のわれわれが助けられたわけ。 [助かつ] 「徹」
- (2) あたくし、(主人に)そうやって育てられてるうちに、… [育つ] 「徹」

上の例文のように「有情の受け身」の場合には、有対自動詞で書き換えようとすると、動作主が明示できなくなる。例文 1,2 は有対自動詞能動表現で書き換えた次のような文は非文になってしまう。

- (1) *その海軍さんに陸軍のわれわれが助かったわけ。
- (2) *あたくし、(主人に)そうやって育ってるうちに、…

このことは、有対他動詞受け身表現が、有対自動詞能動表現には存在しない「動作主」の存在を暗示するという機能を果たしていることを意味している。それに対して、「非情の受け身」の場合は、有対自動詞能動表現においても、動作主を「によって」という助詞を伴って示すことが可能なのである。このことから、「非情の受け身」の有対他動詞受け身表現には、「有情の受け身」の場合のような「動作主の暗示」という機能はきわめて希薄だと考えられ、有対自動詞能動表現との書き換えがかなり可能であると考えられる。

さらに、動作主の存在が考えられないようなものもある。

(28) タイムというものが、夢の中ではグーッと伸ばされるんですね。 [伸びる] 『徹』

(29) 大きなポリープがみられる場合は、… [みえる] 『外』

(30) 税金その他が半減されるんです。 [半減する] 『徹』

このような場合は、動作主の存在を示すために有対他動詞受け身表現が用いられているとはきわめて言い難く、有対自動詞能動表現でも十分に書き換え可能な場合である。

以上のことから、現代において、有対自動詞能動表現で表現可能なものが有対他動詞受け身表現で表現されるようになってきている、ということがいえるだろう¹⁹⁾。この結果、「非情の受け身」が増加したと考えられる。

3.2 「無対他動詞」の「有対他動詞」への侵食

他動詞受け身表現が増加したもう一つの要因として、漢語サ変動詞の増加に伴って漢語サ変動詞の「無対他動詞」が同義の和語「有対他動詞」にとってかわった、ということを挙げたい。

- | | | | |
|---|-----|--------|-------------------|
| 1 | a | (大阪府は) | 豊中市に 府営住宅を 建てた。 |
| | b-1 | | 豊中市に 府営住宅が 建てられた。 |
| | b-2 | | 豊中市に 府営住宅が 建った。 |
| 2 | a | (大阪府は) | 豊中市に 府営住宅を 建設した。 |
| | b-1 | | 豊中市に 府営住宅が 建設された。 |

上の例文1,2において、両者とも同じ意味の事象を表現していると考えられる。「建てる」という和語動詞と「建設する」という漢語サ変動詞は同義であり、例文1aと2aは同じ意味の事象を表現していると考えられる。しかし、「府営住宅」を主

¹⁹⁾野村(1983)は、已然態において、明治時代以降、「である」という能動表現が、「受け身+である・ている」という他動詞受け身表現に侵食されてきている、という事実を数量的に示している。さらに、その傾向が、無対他動詞に始まり、有対他動詞に及んでいることを指摘している。

語にした表現を考えると明らかな違いが出てくる。和語動詞の「建てる」の場合には、有対他動詞であるので、他動詞受け身表現(1b-1)と自動詞能動表現(1b-2)の2つの表現が可能であるのに対して、漢語サ変動詞の「建設する」の方は、無対他動詞であるため、他動詞の受け身表現(2b-1)の1つの表現しか存在しない。

明治時代以降、西欧語からの翻訳が次々と行われ、その際に訳語として漢語が用いられた結果、漢語の数が非常に増加した(池上 1957・松村 1958)。この漢語の増加に伴って漢語サ変動詞も増加し、「話しことば」においても漢語サ変動詞が急増したことが、進藤(1983)によって数量的に示されている。今回の調査においても、受け身動詞中に漢語サ変動詞の占める割合は、江戸時代の場合には 661 中わずか 6 語(0.9%)(『黄表紙』を含めた 747 語中 7 語(0.9%))にすぎなかったのに対して、現代の場合には、735 例中 73 語(9.9%)と、漢語サ変動詞の占める割合がかなり増えていることがわかる。そして、「非情の受け身」においても、江戸時代には漢語サ変動詞が皆無であったが、現代では、85 語中 27 語(31.8%)が漢語サ変動詞であった。

(31) 日本が敵前上陸されて、分断されたときに、… [分かれ] 『徹』

(32) 健康保険っていうのがちゃんと整備されてなかった頃 … [整つ] 『徹』

(33) 映画が発見されまして、… [見つかり] 『徹』

上の例文 31,32,33 の場合、「分ける」・「整える」・「見つける」という有対他動詞の和語動詞が、「分断する」・「整備する」・「発見する」という無対他動詞の漢語サ変動詞にとって代わられることによって「分かれる」・「整う」・「見つかる」といった有対自動詞能動表現による表現の可能性を失い、他動詞受け身表現で表現するしかなくなったのである。このように、同じ意味を表わしながらも、和語他動詞の場合は有対他動詞であるのに、漢語サ変動詞では無対他動詞であるもののがかなり見られる²⁰⁾。こういう理由で、無対他動詞の漢語サ変動詞が有対他動詞の和語動詞にとって代わった結果、和語動詞による有対自動詞能動表現が減少するとともに、他動詞受け身表現が増加したと考えられる。

²⁰ 漢語サ変動詞については、自他同形のもの(完成する等)があるなど、一概に取り扱うことはできず、細かい分析が必要であるが、今回は言及せず、今後の研究課題としたい。

以上、明治時代以降、「非情の受け身」といわれるものが、「書きことば」だけでなく「話しことば」においてまで増加したということを実際の言語データを用いて、数量的に実証し、また、江戸時代と現代の「非情の受け身」の特徴の変化についても考察した。次に、「非情の受け身」の増加要因として、有対自動詞能動表現が有対他動詞受け身表現にとってかわられたことと、明治時代以降急増した漢語サ変動詞の和語動詞への侵食の結果、和語動詞の自動詞能動表現が漢語サ変動詞の他動詞受け身表現にとって代わられたということを挙げた。

参考文献

- 池上秋彦,「江戸語資料としての江戸小咄」,『桐朋女子学園紀要』第三集,1953
 池上楨造,「漢字流行の一時期」,『国語国文』26巻6号,1957
 金水敏,「受動文の歴史についての一考察」,『国語学』164,1991a
 金水敏,「受身の史的変化——くによってく受身文の起源」,日本語シンポジウム「言語理論と日本語教育の活性化」発表論文,1991b
 久野暉,『新日本文法研究』,大修館書店,1983
 黒田成章,「受身について久野説を改釈する——一つの反批判」,『日本語学』1986.2
 小杉商一,「非情の受身について」,『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』,1979
 小松寿雄,『江戸時代の国語 江戸語』,東京堂出版,1985
 柴谷方良,「ヴォイスの文法」,日本語シンポジウム「言語理論と日本語教育の活性化」発表論文,1991
 清水慶子,「非情の受身の一考察」,『成蹊国文』第14号,1980
 進藤咲子,「江戸時代の会話文の長さ」,『近代語研究』1,武蔵野書院,1965
 土屋信一,「東京語の成立過程における受身の表現について」,『国語学』51,1962
 西川真理子,「日本語のく受け身表現くの変化——江戸時代と現代のく話しことばくの比較から——」 大阪大学大学院言語文化研究科修士論文,1991
 仁田義雄,「持ち主の受身をめぐって」,『藤森ことば論集』,藤森ことばの会編,清文堂,1992
 野村雅昭,「近代語における既然態の表現について」,『日本語研究』15,有精堂,1983
 早津恵美子,「有対他動詞の受身表現について」,『日本語学』1990.5
 原田信一,「中古語受身文についての一考察」,『季刊文学・語学』74号,1974

益岡隆志,『命題の文法』,くろしお出版,1989

益岡隆志,「受動表現と主観性」,『日本語のヴォイスと他動性』,くろしお出版,1991

松村明,『江戸語東京語の研究』,東京堂出版,1957

松村明,「明治以後の日本語」,『現代国語学』3,筑摩書房,1958

三浦法子,「平安末期の受身表現についての一考察」『岡大國文論稿』創刊号,1973

宮地幸一,「非情の受身表現考」,『近代語研究』2,武蔵野書院,1968

森山卓郎,『日本語動詞述語文の研究』,明治書院,1988

山田孝雄,『日本文法論』,宝文館,1908

付記: 本稿は、国語学会平成三年度春季大会における口頭発表をまとめ直したものである。発表を通じて貴重な御教示を下された先生方、論著等を通じて参考にさせて頂いた先生方に心から感謝致します。

言語資料:

現 代

<映画シナリオ>

- | | | |
|-----------------|-----------------|--------------------|
| 1 バカヤロー!2(1989) | 2 愛と平成の色男(1989) | 3 花の降る午後(1989) |
| 4 ザジ(1989) | 5 ベっぴんの町(1989) | 6 夏の果実(1989) |
| 7 キッチン(1989) | 8 レディ!レディ(1989) | 9 十六歳のマリンブルー(1990) |
| 10 ドンマイ(1990) | | (以上、シナリオ協会) |

<ドラマシナリオ>

- | | | |
|------------------|------------------|------------------|
| 1 島田太郎氏の災難(1990) | 2 どんでん家族(1990) | 3 伊東家の三兄弟(1990) |
| 4 幸福な市民(1990) | 5 海照らし(1990) | 6 恋愛模様(1990) |
| 7 火の用心(1990) | 8 時の壁の中に(1990) | 9 外科医・有森冴子(1990) |
| 10 渴いた夏(1990) | 11 彼女たちの選択(1991) | (以上、映人社) |

<対談集>

- 徹子の部屋 1(1976 放送分) 徹子の部屋 2(1977 放送分) (朝日新聞社,1985)

江戸時代

<洒落本>

- | | | |
|-----------------|-----------------|--------------|
| 1 遊子方言(1770) | 2 辰巳之園(1770) | 3 甲斐新話(1775) |
| 4 卯地臈意(1783) | 5 古契三娼(1787) | 6 総籬(1787) |
| 7 道中粹語録(1789) | 8 傾城買四十八手(1790) | 9 繁千話(1790) |
| 10 傾城買二筋道(1790) | 11 錦之裏(1791) | |

<滑稽本>

- | | | |
|-----------------|--------------|-----------------|
| 1 東海道中膝栗毛(1802) | 2 酩酊気質(1806) | 3 戯場粋言幕の外(1806) |
| 4 浮世風呂(1809) | 5 浮世床(1811) | 6 四十八癖(1812) |
| 7 大千世界楽屋探(1817) | | |

<人情本>

- | | | |
|----------------|----------------|--------------|
| 1 春色梅児誉美(1832) | 2 春色辰巳之園(1835) | 3 春告鳥(1836)) |
|----------------|----------------|--------------|

<黄表紙>

- | | | |
|------------------|------------------|------------------|
| 1 金々先生栄花夢(1775) | 2 高慢齊行脚日記(1776) | 3 化物大江山(1776) |
| 4 桃太郎後日晰(1777) | 5 親敵討腹鞭(1777) | 6 参幅対紫曾我(1778) |
| 7 辞闘戦新根(1778) | 8 無益委記(1779) | 9 案内手本通人蔵(1779) |
| 10 掟化狐通人(1780) | 11 虚言八百万八伝(1780) | 12 時花吟鶴茶曾我(1780) |
| 13 一流万金談(1781) | 14 見徳一炊夢(1781) | 15 当世大通仏買帳(1781) |
| 16 通増安宅閑(1781) | 17 是清百人一首(1782) | 18 御存商売物(1782) |
| 19 咄多雁取帳(1783) | 20 万載集著微来歴(1784) | 21 天慶和句文(1784) |
| 22 頭てん天口有(1784) | 23 狂言好野暮大名(1784) | 24 吉原大通会(1784) |
| 25 従夫以来記(1784) | 26 江戸生艶気樺焼(1785) | 27 大悲千禄本(1785) |
| 28 莫切自根金生木(1785) | 29 天道大福帳(1786) | 30 明矣七変目景清(1786) |
| 31 亀山人家妖(1787) | 32 面向不背御年玉(1787) | 33 時代世話二挺鼓(1788) |
| 34 鸚鵡返文武二道(1788) | 35 悦晶辰蝦夷押領(1788) | 36 文武二道万石通(1788) |
| 37 孔子稿千時藍染(1789) | 38 拝寿仁王参(1789) | 39 奇事申洲話(1789) |
| 40 天下一面鏡梅鉢(1789) | 41 黒白水鏡(1789) | 42 照子浄頗梨(1790) |
| 43 心学早染艸(1790) | 44 即席耳学問(1790) | 45 遊妓宴卯角文字(1790) |
| 46 京伝憂世之酔醒(1790) | 47 十四傾城腹之内(1793) | 48 敵討義女英(1795) |
| 49 初登山手習方帖(1796) | 50 无筆節用似字尽(1797) | 51 俠太平記向鉢巻(1799) |

注：江戸時代の資料は、『日本古典文学大系』（岩波書店）・『新日本古典文学大系』（岩波書店）・『日本古典文学全集』（小学館）・『新潮日本古典集成』（新潮社）・『江戸の戯作本』（世界思潮社）に収録されている。

（ただし、文献名は一部現代漢字表記に直してある）